



五月^{マイバウム}柱建てて青空^{アスカ}広げけり
青水^{アヲミヅ}無月何処より舟のきしむ音
夏館^{ナツカン}胸像どれもはかなき眼
若夏の^{ワカナツ}一管の音や来訪^{ライホウ}神^{カミ}
梅花藻の水を^{ウヅマヅ}髣^{フウ}せる冥^{メイ}さかな
砲弾のごとき打^{うち}桶^{よけ}や夏の潮
花吹雪死者は刹那に去りゆける
ファウストもニーチェも遠し梅雨に入る
杼の舟の行きつ戻りつ織る月光
梅雨^{メウ}じめりモディリアーニの首伸ぶる
行商の泊まりし記憶木の芽和
滴りのしぶき水晶裂くごとし
くちなしや雨音に陰陽のあり
今生に聖者は不在蜘蛛の糸
今生は根性である芥子の花

*

佐藤映二
関千賀子
矢島惠
眞榮城いさを
川村五子
久保美智子
小林さなえ
宮地良彦
窪田英治
折井眞琴
一條友子
大澤淳基
柿谷有史
加瀬ひろし
渡辺正剛

蛇遊ぶ庭付けて家売りにけり
神経をだらりとさせて冷奴
風炉灰や百年を経て黄土色
春満月氷山またも崩れたる
樹は水の柱やひと梅雨待てり
竹落葉時は螺旋に降り積める
いとけなやお白様とふ桑被ぎ
恐竜の血筋もちけり燕の子
紫蘇^{ムラサキ}辣^{カラ}萋^ヒ茗^{メイ}荷^カ蒜^ス父の世話
鵜遣の光れるものは身に着けず
湯屋の明け燥ぎ待ちをり島四国
問うことは答えることぞ座禅草

*

パンゲアの如き瘡蓋夏近し
冷酒や塩ならあるといふ鰯^{いわし}夫^そ
一二〇円の贅沢初夏の夕

太田 薫
玉井利之
北浦 深
佐藤由美
伊藤由希子
瓜田紀子
梶原夢乃
柴田洋子
玉木愛子
原田宏子
下川千里
原保次郎
佐々木寿子
三品吏紀
三水芽生

岳・見えたるひかり 八月

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

(480)

はじめに。南ドイツのハイデルベルクにはネッカー河を眼下に、山裾に哲学の道と称される一〇〇〇メートルほどの歩道がある。いく分の傾斜の道で、ハイデルベルク大学にかかわった師も弟子も歩きながら思索をした。京都の南禅寺から銀閣寺辺までの哲学の道の本家はこちら。歩きながら私も考えたいと思ったが、折から炎天下、へ離れゆく一步一步や道灼くる(北野妙子)といった感じで、集中できなかった。しかし、「歩く」ことに大に関心をもったのが収穫だ。

梅花藻が水を靸すという着眼

梅花藻の水を靸せる冥さかな 川村 五子

梅花藻は梅の花に似た白い花を夏に咲かせる花藻。水が花藻を靸すならば驚かないが、藻が水を靸すという見方に注目した。水中とはいえ、水面近い。梅花藻の上を流れる水の底からぼおっと押し上げられたような冥さを捉えた。地味な光景であるが着眼の確かさがある。

青水無月何処より舟のきしむ音 関 千賀子

この舟はどんな舟であろうか。六月二十一日逝去した作者がその直前に投句した一句だけにぎりぎりのいのちのあり方を「舟のきしむ音」と捉えた感性に最後まですぐれた詩人である。

あった千賀子さんの片鱗をみる思いだ。幻想さえもリアルだ。

夏館 胸像 どれもはかなき眼 矢島 恵

夏の美術館か宮殿。日本風の東屋ではない。堂々たる体軀の胸像が並ぶが、どれも眼がうつろ。はかない。人物像はなによりも眼が焦点。あゝそれなのにと感じる。私にも「胸像はなべて疲れて夏嵐」というドイツ旅吟がある。眼を据えて核心を突いている。

若夏の 一管の音や来訪神 眞榮城いさを

宮古島北部島尻地区の厄払い行事。仮面をつけた三人の来訪神が人々を追いかけて泥を塗りつける。島の祭が来た笛の音。泥を塗るのが厄払いとはいかにも南の島らしい。掲句は祭の喧騒ではなく、ことぶれの笛の音を詠いゆかしい。

砲弾のごとき打桶や夏の潮 久保美智子

「打桶」は海水を汲み上げ溜める桶。塩田の砂に撒くためである。呼称が忘れ難い。片手に抱く砲弾のような形だ。原句は「青葉潮」であったが添削。青葉潮は太平洋の黒潮をいい、能登をめぐる日本海流は夏の潮。岳集に出る「夏潮の疾し塩田釜屋裏」(幹自聲)も同所詠か。ともに佳句。

花吹雪死者は刹那に去りゆける 小林さなえ

チェモ、ことばにただけでわっと大海が拡がる。

桴の舟の行きつ戻りつ織る月光 窪田 英治

機で縦糸の中を「行きつ戻りつ」させるのが「桴の舟」。桴は梭も同じ。月光と置き、いっそう幻想的。短歌とは違う俳句の抒情とはなにかを半生の課題に見つけつゝある作者。

梅雨じめりモディアーニの首伸ぶる 折井 眞琴

かつて眞琴の時代があったといいたいほど「田水張りつめ花道を帰るごと」(『孔雀の庭』)の句などで宝塚の花形スター以上に湧かした作者。このところ「岳」がどうもさみしいのは、この作者などが力を沈めているからではないか。一人の作者の活躍がそれほど全体に影響を与えるものではないとも思うが、花形は逼塞してはだめ。伸びるはずのないモディアーニの描いた女の首が伸びる。世はふしぎに満ちている。そこへ着目した。作者の復帰の兆しを感じる。

行商の泊まりし記憶木の芽和 一條 友子

そういえば我が家も行商のおじさんを家の玄関先へ泊めてやったことがあった。父も大店の丁稚時代があっただけに、苦勞人へは格別に親切だった。それだけがとりえの父であった。庶民感覚を持ち続ける作者に感心する。

滴りのしづき水晶裂くことし 大澤 淳基

完璧な句。これ以上に美しい句はないのではないか。

くちなしや雨音に陰陽のあり 柿谷 有史

今月の秀句

五月柱建てて青空拡げけり 佐藤 映二

ドイツの地貌季語「五月柱」(Maibaum)。バイエルン州の各地で町の広場に五月の木を立てる。青と白の布を巻き付けたように塗られた木を六月のドイツの旅で一見した。もともとはゲルマン人が森の女神を祀る儀式であったとか。御柱のようなもの。それから青空が拡がるという健康で素朴な感じ方がいかにもドイツ風。集落ごと、五月の木をぬすまれないように見張役が付くとか。

目が不自由な作者。雨音を聴き分けるこの鋭さに感銘した。くちなしの花の白い気品がいい。感覚の冴えが芳う。

今生に聖者は不在蜘蛛の糸 加瀬ひろし
今生は根性である芥子の花 渡辺 正剛

前者は銚子在住の作者。関東支部例会に皆勤。お釈迦さまはいないといよいよ悟る。後者は湘南の剛の者。まじめ一筋。たまたま今生を問うている。「岳」の支え。ともに尊者。

こんな冷奴の食べ方があるつか

神経をだらりとさせて冷奴 玉井 利之

実は私は冷奴にそれほど入れ込まないので、本当のところ

今月の秀句

蛇遊ぶ庭付けて家売りにけり 太田 薫

オリンピック前で東京都内が整地にいそがしい。そんなしわよせではないであろうが、田舎の実家でも売った感慨の句。どうせ、もう住むこともないから、この広い家は手放そう。「蛇遊ぶ庭」を付加したことが手柄。俳味が出たとはいえ、蛇への日本人の好き嫌いや憎悪の反応は特別だ。さばさばと日常詠が巧い作者。掲句にも、そのさばさばした感じが生かされている。小学生に俳句を教える愛敬は拔群の一人。

『遠野物語』の世界をほうふつとさせる。意欲ある作者。

恐竜の血筋もちけり燕の子 柴田 洋子

子燕の元気のよさ、雑食性、残酷さなどから「恐竜の血筋」と進化論を踏まえたいい方をしたもの。対比の意外性に注目。

紫蘇辣萋茗荷蒜父の世話 玉木 愛子

一連、作者が手を掛けるものを並べたものか。父が上記の野菜などの世話をするというのではないであろう。俳味あり。

鵜遣の光れるものは身に着けず 原田 宏子

目の付けどころが巧い。鵜飼の主の万事心遣いがにくい。

今月の秀句

パンゲアの如き瘡蓋夏近し 佐々木寿子

「パンゲア」とは約三億年前、大陸がアメリカやユーラシアと分離する前に一つの塊であったときの名をいう由。途方もない喩えにびっくりした。それが瘡蓋の喩えとは。作者は三十代はじめの新進。若さとは、才能とは、おそろしいほどだ。傷が治りかけるときの瘡蓋を剥ぐかどうか気になる。暑いときは尚更。パンゲアの映像からの着想だろうか。パンは全て、ゲアは大地の女神の意とか。古代ギリシャ語からとも。驚き桃の木。

掲句のよさがしんからはわからない。冷奴を前に、「神経」がだらりとなるとはすごい。そんなに放下していいものか。冷奴という字もすごい。目の前に冷たい生の豆腐がある。それを同性愛の相手でもあろうか冷奴とは。俳味横溢。

風炉灰や百年を経て黄土色 北浦 深

夏の間、茶道では風炉が置かれる。その灰への着目。以下の表現がなんとも大げさで、中国大陸でも思わせるいい方にひかれた。「黄土色」がいい。作者は愛知県から車で私のやっている岳の句会に来られる。一途でスケールも大。

春満月氷山またも崩れたる 佐藤 由美

春の満月のエネルギーで北極の氷山が崩れるとも思われないうが、地球の温暖化によってなどといわなかった。意外性とはこんな着想をいう。文章にしたら到底一行ではすまない。

樹は水の柱やひそと梅雨待てり 伊藤由希子

樹が水の柱との着想は考えたすえか、ふいなる思い付きか。梅雨を待つとは前者の結果であろうが、やさしさがある。

竹落葉時は螺旋に降り積める 瓜田 紀子

熟考の作と思う。過去から現在、さらに未来へ時間が螺旋状に積もるとは、思い出すという行為を振り返るだけでも納得できる気がする。竹林での思考ではないが季語も生きる。

いとけなやお白様とふ桑被ぎ 梶原 夢乃

岩手、宮城など東北地域では蚕のことを「お白様」とか。

湯屋の明け熾き待ちをり島四国 下川 千里
問うことは答えることぞ座禪草 原 保次郎

前句の島四国とは今治市大島全域を巡る遍路のこと。徒歩二泊三日ほどで八十八ヶ所巡ったご利益ありとか。後句は禅問答ではないが、一つの真理を思わせる。

青雲集―なに出るかわからない楽しみ

冷酒や塩ならあるといふ鰯夫 三品 吏紀

変った句変った句と求めているわけではないが、これは地味な一句。妻を亡くした後、あるのが塩くらいとは切ない。仲間が来て、冷酒で一杯となったが肴がない。さてさて。帯広在住の三十代の若手。なにが詠まれるかわからない楽しみ。かならずしもリアルに考えなくても、想像力が大切。

一二〇円の贅沢初夏の夕 三水 芽生

啄木を研究したいがために長野県から盛岡大学へ入学した十九歳の大学生。大学から下宿への帰途、一二〇円のジュースを販売機で買った。これが初夏の夕べの贅沢とは、啄木ほどにつつましい。涙が出るほどだ。実感が大切。啄木研究も俳句もきつと上手になろう。

田と空は恋人同士田植え時 藤原ひとみ

水田と空とが一つに。田植え時のういういしさの比喻がいかに素朴。

毎月、青雲集の投句者がふえている。うれしいと思う。

○気になる表現

カタカナの使い方

原句 目を数多もてども寂しイトトンボ 長瀬 冬嵐

添削 目を数多もてども寂しいととんぼ

理科では学名をカタカナで書くことから「イトトンボ」をカタカナにしたと受け取れるが、俳句ではひらがな表記「いととんぼ」か、漢字表記「糸蜻蛉」でよい。

原句 アカシアや夜のをんなよりも香る 三品 史紀

添削 夜のをんなよりもアカシア香りを

「アカシア」は外来種なので、俳句表記もカタカナとしている。近現代の外来種で、漢字表記のないものはカタカナ。

季重なりの問題

原句 遠足の潮干狩りし浜工場群 田中 清子

添削 潮干狩せし浜にたつ工場群

「遠足」「潮干狩」ともに春の季語。掲句は「遠足」を省くことができる。実際には遠足で潮干狩に行ったとしても、「潮干狩」が季語なので、それで充分。

原句 五月晴れ息苦しい程の新緑よ 齋藤 元紀

添削 山晴るゝ苦しい程の新緑よ

「五月晴」「新緑」ともに夏の季語。両方用いるのは読み手への押しつけになる。新緑だけで充分に夏五月を連想するの

で、どちらかを生かすならば「新緑」を生かす。読み手が想像する余地を残さないと、面白いとは思われない。季語ではない「山晴るゝ」を上五とした。

原句 梅雨入りにかつこうの声校庭で 佐藤 悦雄

添削 かつこうや校庭梅雨に入りたる

「梅雨入り」「郭公」の夏の季重なりを避けようと、「雨の日にかつこうの声校庭で」「雨期に入りかつこうの声校庭で」と工夫してみたが、面白くない。ここは、ちょうど梅雨入の日に郭公が鳴きだした実感を生かし、季重なりでもそのままにした。季重なりが絶対に駄目とはいえない。面倒な判断——面白いかどうか、作者・選者の主観が入る。基本としてはできるだけ一句一季語の方がすっきりする。

「青嶺」は季語、「青山」は季語ではない

原句 青山や削りて木つ端腥き 小熊 里利

添削 夏山や削りて木つ端腥き

なかなかいい句である。ところが市販の歳時記では「青嶺」は季語、「青山」は季語になっていない。これは理不尽なことで説明がつかないと思われるかもしれないが、今のところ「青嶺」には例句があるが「青山」には例句がない。これくらい説明だけ。

例句 青嶺あり青嶺をめざす道があり 大串 章

例句 青嶺もて青嶺を囲む甲斐の国 丁野 弘

里利さんの句は「夏山」で原句以上にいい句になったか。